

第11章 夫婦

夫婦の会話

夫婦の会話に終わりはない。

「海」の会話

「今日は晴天で海が真っ青だわ」「海は、なぜ青いか知っている?」

「さあ」「空が映っているからだよ」

「そういえば、小学生の時に読んだ図鑑や百科事典に書いてあった。一時期、小学生用に動植物の不思議(なぜどうして)シリーズの本が、たくさん出版されて、みんな読みふけたね」「そうそう、小学生用の本は、意外に詳しく良くできていた」。

私たち夫婦は、このような時、同じ年齢なので話が合う。

「お茶」の会話

夫が言った。「お寿司を買って来ました。お寿司にはお茶です。お茶、お茶」。そして、「爪切りは、どこでしょう。確か、この辺りにあったはずですが、どこでしたっけ」と爪切りを探し、足の爪を切った。それから机の上にあった落花生をボリボリ食べて「お茶をください。お茶」と言った。「それって、いつも、うるさいわ」「気にしないよ」。

「お茶なら紅茶、緑茶、コーヒ、ココア、アルゼンチンのお土産のマテ茶、何でもあるわ。自分でもできるでしょう。私は今、テレビで『ヒューマン』を観て教養を高めているので忙しいのよ。」

人間に一番近いチンパンジーは、ブドウとリンゴでは、ブドウの方が好きです。しかし、リンゴを沢山持っていて、好きなブドウと交換しようとはしない。人間は、沢山リンゴを持っていれば、ブドウとも、主食である小麦とも交換する。小麦は腐るので、コイン（お金）が生まれたのよ」。

◆NHK「ヒューマンなぜ人間になれたのか」第四集「そしてお金が生まれた」放送日、平成二十四年二月二十六日（日）夜九時から。番組の進行役は藤原竜也。

すると夫は「それは知っています。僕は生物の先生ですからね」と平然と言った。そして、奇妙な事を言い出した。

「僕にお茶を入れるのは、嬉しい事でしょう。僕がいなくなったら、僕にお茶を入れる事もあ

りません。『うれしい』と『うるさい』は、お友だちなんだよ」

「は？なにそれ。お友だちだなんて。どこが？」

すると、夫は紙に「uresii」と「urusai」と書いた。そして「ほら、母音が少ししか違わないですよ。お友だちです」。私も「うれしい」と「うるさい」と書いた。「全然違うわ。最初と最後が同じ言葉は、いくらでもあるわ」。

それから、緑茶を入れて二人で寿司を食べた。「これって駅前の江戸前寿司でしょう。久しぶり。美味しい」「あなたが好きだと言っていたから買って来ました。お寿司には緑茶ですね。お茶をもう一杯ください」。

「津軽恋女」の会話

平成二十七年（二〇一五年）六月三十日（火曜日）、NHK『歌謡コンサート』を観ていた。『津軽恋女』を三山ひろしと福田こうへいが歌った。

「あなたの好きな歌ですね」「新沼謙治がいるのに、なぜ出さないのかしら？」「三山ひろしが低音部を歌って、福田こうへいが高音部を歌っていますね。二重唱に編曲してあります。なかなかいいじゃないですか」「全然だめだわ。本人が歌えるのに出さないなんて。この歌は、ケンちゃん（ケンちゃん）が歌うからいいのよ」「『津軽恋女』が、みんなに愛される歌になったということは、喜ばしい事です」「そうだけど、ケンちゃんに歌ってもらいたかったな」。

翌日、童謡の会があったので「NHK『歌謡コンサート』を観られた方？」と訊くと、三、四

人が手を上げただけだった。「ケンちゃんって、だれ？」と言っている人もあった。『津軽恋女』は歌謡曲の名曲中の名曲です。

「猫」の会話

「最近、ろくちゃんが来なくなつたわ。せつかく可愛がつていたのに。あなたが、『野宿なんて木枯し紋次郎のようだね。紋次郎、紋次郎』なんて呼んだからよ」すると、ろくちゃんが来なくなつたのは、僕の責任と言うことになるのですか」「私もいけなかつたわ。エサをやる時、地面に投げたりしたから。反省しているわ」「そうだよ。ひどい扱いをされたから出て行つたのさ」

「ところで、模様は同じ猫はいないが、猫の顔はみんな同じって知っている？ 猫の解剖をしてみると、頭の大きさと形は同じだから、脳の研究によく使われる。同じ大きさという事は、電極を脳に突き刺し、脳を刺激する実験に使うのに便利なのだ。そろっているから、データが取りやすい。メスとオスでは性格が全然違う」

「そうだよね。メス猫の方が、圧倒的に、おとなしい。オス猫は激しいね」「エサをもらう時、いかくする猫と、人にこびている猫では、人に甘い猫の方が生き抜く。子猫を外に出すと、元気のいい猫は、天敵にやられて死ぬ。しかし、とろい猫、人に甘い猫は共存して生き抜く」

「天敵って何？」「カラスとか、ハヤブサとか、トンビだよ」「猫が鳥にやられてしまうの？」「生まれたばかりの子猫だよ」「ろくちゃんは、カラスがねらっていたネズミを横取りして、口にくわえて見せに来た事があつたわ。いつものほんやりした顔ではなくて、キリリとして怖い眼つき

だったわ。ろくちゃんは、盗まれたのかもしれない」「野良猫を盗む人はいないでしょう。きつと、さかりがついて、メスをもとめてさまよっているのさ。オスは、どの動物の世界でも哀れなものさ」。私の家は御殿場線の線路の近くにあり、昔は私の家しか建っていないかった。それで猫や犬を棄てる人があり、野良猫や野良犬を切らした事がなかった。時には生まれたばかりの猫や犬が門前に置いてある時もあった。今は犬や猫を棄てる人がいなくなった。その代り、踏切を飼い主と一緒に、洒落た洋服をきせられた犬が次々に通る。

「お父さん」の台詞

「お父さん、もう『やすぼう』よ」「その『やすぼう』とは奇妙な言葉ですね」「私が作った言葉よ。『休もう』と、『遊ぼう』を一緒にして短くした言葉よ。今、短くするのが流行っているでしょう。たとえば木村拓哉はキムタクで、豊川悦司はトヨエツだよ」「キムタクは、どの映画に出て、いまいちだね」「そうね、映画『武士の一分』では、刀の扱いが悪くて軽々しかった。使う刀は軽くても重々しく見せなければいけない。人を斬るのよ。せつかくの主役が、だいなしだったわ」「すみません」「あなたが謝ることはないわ。ファンの気が知れないわ」「有名な山田洋次監督が、演技指導しているはずだがなあ。どうしたのかなあ。トヨエツはNHK大河ドラマ『江(ごう)』では、織田信長役で、信長が出ると、視聴率がグーンとアップしたそうだよ」「トヨエツは、テレビドラマ『青い鳥』の柴田理森役しばたよしもりがよかったわ。理森と口にしただけで、うーん、どうしましょう。キャーキャーしちゃうよ」「トヨエツは、若い女の子とからむシーンがうまいね。

だから、オバサマ方のファンが多い」「そうですか」。

二人で休んでシュークリームを食べた。「シュークリームには、お茶ですね。お茶はまだですか。ほら、お茶が出ない内に、食べ終えてしまいました」。私は、休んでいる暇がない。私は自分で作った「やすぼう」という言葉が気に入っている。

「玄関」での会話

「どっこいしょ、それでは、ばあさんや、行って来ますよ」「今日は、学研で打ち合わせですね。場所と時間は、大丈夫ですか」「場所は五反田、時間は三時、よし、大丈夫だ」「では、朝食べて、昼食べない。夜はどうしますか」「会議が終わるのが六時頃だから食べて来るよ」「では、朝食べて、昼食べないで、夜食べない」「あたり」「行ってらっしゃいませ。これから私は、羽を伸ばしちゃうのよ。買い物に行ったり、テレビを観たり、ルンルンのいい生活だわ」「羽は伸ばしっぱなしだね。たんだ事がないでしょう」「そんな事はないわ。遅れますよ」「今日は日曜日だから電車はすいている。大丈夫さ」。夫は、「そうだね」と決して言わない。

夫が帰宅した。「ただいま」「おかえりなさいませ。ごくどうさんでした」と、膝に手を置いて頭を下げて迎える。夫がニコニコして「極道ごくどうさんじゃあないよ。御苦勞ごくろうさんでしょう」と言う。私は、この挨拶が気に入っている。

「訂正」と「お詫び」の会話

朝七時からのNHKニュース『おはよう日本』を観ていた。すると男性のアナウンサーが突然、「先ほどのオスプレイの事故について去年とお伝えしましたが、今年（平成二十四年）でした。訂正してお詫びします」と言った。

「原稿を書いた人が間違えたのに、アナウンサーが謝ったわ。ニュースを読み違えたわけではないのに。最近、字幕の間違ひも多いね。アナウンサーが謝ってばかりだわ」と言うと、夫がもしろい事を言った。

「間違いはいけないけれど、人には間違いが付き物さ、間違えない人はいない」「そうだね」「その間違いが単純ミスで、だれにでもわかる事だったら、それは間違いとは言わない」「そうかな」「テレビを観ていた人は、今年四月と六月にオスプレイが墜落事故を起こしている事を認識している」「そうだね。四月はモロッコで、六月はフロリダで墜落している。そんな危険なオスプレイを山口県岩国市の米軍岩国基地に搬入した後、沖縄の普天間基地に配備し、秋から本格的に運用する方針よ」「ほら、わかっているでしょう」「でも」「僕も間違えてばかりいる。間違いだらけさ。そもそも、あなたと結婚したのが間違いだった。違いますか？」「そうだね」。

横田基地配備計画のオスプレイが話題になっている最中、米ハワイ州オアフ島で平成二十七年五月十七日午前十一時四十分（日本時間十八日午前六時四十分）ごろ、海兵隊の新型輸送機MV22オスプレイが着陸に失敗し炎上、乗っていた隊員二十二人のうち、一人が死亡、二十一人が病院に搬送された。

「いびき」と「寝言」の全話

夫は、いびきをかく。その間に寝言も言う。若い頃は、ロシア語で寝言を言って「襖ふすま（唐紙からかみ）」を蹴つたので寝ている方に倒れて来た。それ以来、二階の西側の襖は、外したままになっている。ある日、いびきをかきながら寝言を言った。大声だったので、「お父さん、大丈夫」と起こした。すると、「クイズに答える夢をみていた」と言った。そう言った直後に、また、いびきをかいて寝た。翌朝、「早押しクイズだったの？」と聞くと、「寝言を言った時は覚えていたけれど、どんな問題だったか今は覚えていない。はて？ なんだったかな」と言った。「いびきに加えて大声の寝言は、やめていただきたい」「僕は気にしていないよ。あなたも、堂々といびきをかいて、寝言を言ったらしいです。心を広く持ちたまえ」。これでは喧嘩にならない。あきれるばかりです。

ある時、旅行から帰った夫が、おもしろい事を言った。「今回は、三人部屋だった。『僕は、いびきをかきますので、よろしく』と言った。すると、一人の人が、『僕もです』と言った。この人は、僕よりすごい、いびきだった。僕なんか、かわいいものさ」と平然と言った。

もう一人の人は、「僕の所では、奥さんのいびきがすごい。いびきをかき出すと、畳をドンとたたくといびきが止まる。しばらくすると、いびきをかくので、またドンドンとたたく。そうやっているうちに、こちらも疲れて来て寝てしまふ」と言ったそうです。話を聞いて、手をたたく大笑いしたけれど、ためしてみようとは思わない。それより、「どこの夫婦も、いびきや寝言には悩まされているのだな」と思うと、複雑な気分になった。しだいに夫を許せる気になってきている。「いびき」や「寝言」が、あわれな事に思えるようになってきた。

「僕が死んでしまったら、いびきや寝言を聞こうと思っても聞けないよ」。夫が言うとおりかもしれない。

「意外な」会話

「タコの八ちゃん足八本というのがあつたでしょう？ 蜘蛛も足が八本なの？」「蜘蛛には、八本の足の他に触肢というのがあつた」と蜘蛛研究家の夫がまじめに言つた。つまらない人だと思つてゐると、意外な展開になつた。

「蜘蛛と言つても足八本とは、これいかに」「おお！ それつて、すごいね。すばらしい」。私が手をたたいて大喜びしたので、夫は調子に乗つた。

「ありがとうなら ミノムシはたち」「そうですか」「これは、『ありがとう』と客から言われた時のテキヤの答えだよ。蟻が十歳なら、ミノムシ二十歳という事さ。知つていた？」。渥美清・主演『男はつらいよ』の映画に出て来る、フーテンの寅さんの有名な口上です。

「花ある街、」三三「ない町」の会話

「あの花は何かな、ずいぶんたくさん咲いているね」「ムクゲよ。ウチの庭にも咲いているわ。アサガオと思つたの？」「そうでしたか」

「もう秋だというのに、ヒマワリ、アサガオ、カンナが、まだ咲いているわ。カンナは黄色が好きよ。昔は農家の庭先に大きなダリヤや真つ赤なグラジオラスが咲いていたものよ。今は庭が

ないね」「夏の花は、みんなでかい。馬鹿でかい花は嫌いだ」

「秋は、コスモス。秋風に揺れるピンクのコスモスがいいわ」「コスモスは雑草だ。抜いてしまえ！」「花が嫌いなのか？」「そんなことはない。花は小さい方がいい」「カワラナデシコは、いかが？」「さあね」「カワラナデシコを知らないのか？」「ピンクの小さい花よ」「そうですか」「こりやダメだ」。

私は、広島県竹原市や千葉県中央区のように、大井町も「花ある街、ゴミない町」になるといふなと思いつつ生け垣には花を植え、毎朝起きると一番に道路を掃いている。しかし、通行人によつて生け垣の水仙は引き抜かれ路上に散乱している。ホウキで掃いたとたんにはタバコが捨てられる。

「小学生の頃、子供会で『道路愛護』をしていたわ。道路をみんなで掃いたり、草をむしったり。その頃は、道路は土や石ころのままだった。私が六年生になった時、アスファルトになり『道路愛護』は終わった」

「犬を散歩させながらタバコを吸っているのは、散歩のかわいがない。高校でタバコと肺癌について教えているのですが。タバコは『百害あつて一利なし』です。きつと、家を出る時タバコに火をつけると、わが家の前まで来ると吸い終えて捨ててるのです。困りますね」「そうですね」。

私は、生け垣の草花を引き抜いて路上に投げ捨ててあるのを見たり、タバコの吸い殻が十本も二十本も路上にばらまいてあるのを目の当たりにするとエネルギーを奪われ元気をなくす。食欲がなくなり、無口になって寝込むこともある。夫が言った。「いじめがいがある人ですね。それでは、

やっている人の思う壺です」「そうだね」「草花を引き抜いて路上に投げ捨てたり、軽いタバコを吸うのは女です。やっているのは女です」「これからも毎日、道路の清掃をするよ。謎の女と戦う」「おお、その調子だ。ゆり坊頑張れ」。

「時計」の会話

童謡の会に男性会員が一人いる。童謡や唱歌を歌う事が大好きで、毎回出席です。女性会員ばかりの中、よほど好きでないと続かない事です。

農協の広報誌に、この男性会員が紹介された。柱時計に腕時計、めざまし時計と、時計を収集するのを趣味にしている。家中いたる所に置かれた時計は二百点を超える。その広報誌を童謡の会で回覧して、みんなで拍手した。「本人より、この写真の方が若い」「ステキ」と言っている人があった。

帰宅して広報誌を見ながら夫と話し合った。

「この人が、いつも話している熱心な童謡の会の男性です。何か時計の歌を歌ってあげたいと思います。有名な時計の歌は三曲あります。『大きな古時計』と、『早起き時計』と、『とけいのうた』です。どれがいいでしょうか？」

「『大きな古時計』（作詞：保富康午 作曲：ワーク）は、おじいさんが亡くなってしまふ歌だから論外ですね」「そうだね。歌詞に♪天国へのぼるおじいさん 時計ともお別れ〜があります。平井堅という歌手が歌って、大流行した年がありました。その後、全く歌われなくなりました」

「小さい頃は、大声を張り上げて平気で歌っていたのに、意識すると、悲しくて泣ける歌だね。」
『早起き時計』と『とけいのうた』は、どのような歌ですか？」

「『早起き時計』(作詞・富原薫 作曲・河村光陽)は、ちつくたくちつくたく ぼーんほん おはようおはよう 夜があけた きれいな朝だよ とびおきろ 時計がなってる よんでいる くだよ」「おじいさんに『とびおきろ』は、よくないですね」「そうだね」。

「『とけいのうた』(作詞・筒井敬介 作曲・村上太郎)は、トコチコチ カッチン おとけいさん コチコチ カッチン うごいてるくだよ」「よし、それがいい。決定だ」「そうだね。どうもありがとう。次の童謡の会で、この人のためだけに、みんなで『とけいのうた』を歌ったら、きっとビックリして喜んでくれるよ。今どきの言い方でサプライズって言うんだよね」「そうです」「楽しみだね。ワクワクするよ」。

「世界一汚い」会話

NHK土曜ドラマスペシャル『負けて、勝つ。』戦後を創った男・吉田茂』平成二十四年九月八日、第一回放送を観た。

酔った吉田茂(演・渡辺謙)が叫ぶ「くそくらえ」。その言葉を初めて聞いた近衛文麿(演・野村萬斎)が「くそくらえ？」と問う。すると吉田が「クソを喰らえという事です。(アメリカ野郎)くそくらえ」。酔った近衛も「くそくらえ」と叫び、肩を組んで「くそくらえ」の大合唱になった。観ていた私は吐きそうになった。迫力のある演技だった。これは、第二回放送の回想シーン

にも使われた。

平成二十四年九月十五日、第二回放送では、テレビ時代劇『木枯し紋次郎』で一世を風靡した幣原喜重郎役の中村敦夫さんなかむらあつおも、ハワイ大学留学やカリフォルニア州パークレー市での若き日の生活を活かして、難なく英語の台詞せりふをこなした。主演の渡辺謙さんは、映画『硫黄島からの手紙』の時より英語がうまくなっていた。

『負けて、勝つ』は、マッカーサーとのやりとりの場面が中心になっている。当然、日本人の役者の台詞も英語だ。視聴者には、日本語字幕が出るが、気楽に楽しむためには英語がわかった方がいい。今は日常生活も英語の時代です。英語のできない俳優は使い物にならない。私の一番身近な若者たち、娘夫婦は四人共英語を話す。夫も蜘蛛の論文を英語で書いたり読んだりしている。英語ができないで取り残されているのは私だけだ。情けない事です。

『負けて、勝つ』には重要な場面がある。吉田が家の風呂に入っている時、安保条約について妻に語るシーンだ。背中を流している妻（この人は後妻、籍は入れていない）が言った。「そのような難しい事は、女のワテには、ようわからしまへん」と。吉田は国民もその程度だろうと決めつけた。ぐずぐずしていたら、ガダルカナルから生還した血気盛んな若者たちに押し切られ、再び戦争になりかねないという独断と偏見で、安保条約に調印した。吉田は、この道しかないと信じていた。その結果、国を揺るがす安保闘争が起き、デモ隊から死者が出るほど混乱した。この後、日本でこれ以上大きなデモが起きた事はない。

◆「負けて、勝つ」は、年を取った俳優が、それぞれ自分流に工夫を凝らして演技をした。脚本は坂元裕二。吉田茂（演：渡辺謙）、近衛文麿（演：野村萬斎）、幣原喜重郎（演：中村敦夫）、芦田均（演：篠井英介）、牧野伸顕（演：加藤剛）、白洲次郎（演：谷原章介）、佐藤栄作（演：高橋和也）、松野鶴平（演：石橋蓮司）、服部卓四郎（演：吉田栄作）、広田弘毅（演：佐野史郎）、鳩山一郎（演：金田明夫）、池田勇人（演：小市慢太郎）その他。

「誤嚥」の会話

「このサヤエンドウは昨日買ったグレープシードオイルで炒めたのよ。軽くておいしい。ゲンゲン」と私が咳き込んだ。「食べながら話すからだよ。食べてから話せばいいのです。年寄りは何が喉に詰まって誤嚥で死ぬ人が多いんだよ」「本当に死ぬかと思った。前に鼻からご飯粒が出た事があるわ」。続いて夫が咳き込んだ。「熱いお茶をガブガブ飲むからよ。ほら、このタオルで、その辺を拭いてください。目が真っ赤よ」「お茶が息道に入った。口の中に物を入れて話すのはいけないね」「そうだね。誤嚥と誤嚥で十円だね」。夫婦で笑い転げた。

「他人のフンドシ」の会話

「蜘蛛の研究者なら、蜘蛛の写真を撮る勉強をした方がいい。他の人が撮った写真を使わせていただいて論文を書くのは感心しません。それは他人のフンドシで相撲をとるようなものです」「僕は気にしないよ」「エッ、他人のフンドシをしても、平気なの？」「平気だよ」。その後、夫

は蜘蛛の写真を撮る練習を始めた。そして、「蜘蛛を水に浮かべると足を開くので、うまく撮れる」という論文を同好会で発表した。

「検便」の会話

「今日の郵便はこれだけです。中に検便のような物が一つあります」「これは検便ではありません。蜘蛛の研究をしている中学生が送って来た標本です」「検便かと思った。昔、検便ってあったね」「そうだね」「検便の日は、マツチ箱に朝取りウンコを入れて、糸で巻いて棒に吊るして学校に持って行った。私は、親に棒に吊るす事をしてもらえなかったのうらやましかった。みんなのウチは、棒に吊るしてもらっていいなあ、と思った事を覚えてるわ。あれは、学校に行って、自分で糸をほどこいたのかしら？ 謎だわ」「山形では、棒に吊るす事はなかったな。あなたは、どうやって持って行ったの？」「私は自分でビニールに入れて持って行ったと思うけれど、はつきり覚えていないわ」「便を見れば、回虫はすぐわかる、動いているから。顕微鏡で見ると回虫のタマゴがわかる。回虫がいると、栄養が奪われて痩せてしまう。だから検便が頻繁にあったのです。薬を飲むと退治できる」「なるほど」「研究者の中に自分の体内に回虫を入れて、どうなるか観察した人がいた。肛門から回虫が出たり入ったり」「そうですね。食事中だから検便の話は、もうやめよう」「この標本の蜘蛛は、長崎の蜘蛛なので難しい。西湘地区の蜘蛛と、かなり違います」「中学生が、まじめに蜘蛛の研究をしているとは、偉いね。指導をして伸ばしてやるといいわ」「そうだね」。

「花粉症」の会話

「私の頭の上で、クシャミをしないでいただきたい。いつも連続二回するわ。ジンジン鼻を咬み続けるのも、やめていただきたい」「花粉症だからしかたがない。今日は特に沢山花粉が飛んでいる」「梅の季節は終わったわ」「スギ花粉が舞っている。蜘蛛の採集で外に出ていたから体調がすぐれない」「スギ花粉?」「大雄山のスギの影響で、南足柄に住んでいる人は、この時期みんなが花粉症だよ」「女性の花粉症は可愛いけれど、男性が花粉症だなんて軟弱だわ」「デリケートと言っていた方がいい」「あなたが? 病院へ行く?」「行きません」「行くとしたら何科かしら」「耳鼻科ですね」「以前、六月頃までクシャミ、鼻水、微熱の時があったわね。病院の薬を飲んだら、すぐに治った」「あの時は、風邪でした。風邪と花粉症は違います」。

私は、花粉症になった事がない。しかし、一度だけ紫色の花をもらった途端、目がシクシクして涙がポロポロ出て、続けて二回も三回もクシャミをした。あわてて花を捨てると、すぐ解消した。あの紫色の花は一体何だったのでしょうか。今となっては、わかりません。

平塚にあった童謡の会で、中年の女性がクシャミをし続け、鼻をかみ続けていた。隣りに座っていた中年の男性が、たまりかねて「きったねえやつだなあ、やめるよ、歌いになんか来るな」と怒鳴って席を立った。その場にいた人たちは、何事かと驚いた。しばらくすると女性もいなくなった。その人が花粉症で、伝染しないと理解していれば、事態は変わっていたかもしれないが、花粉症は、なかなか理解されないものです。

「ほしくせいの」の全話

西之島

「西之島を買いだいたいと思わない?」「思いません」「あの白い部分が、きつと砂浜よ。テントを張って住みたい」「住みません。まだ噴火しているから、岩石がボコンと当たって、ゆり坊は即死ですね」。

ナポレオンの帽子

「ナポレオンの帽子を買いましょうよ」「いりません」「どうして? オークションだから、私たちでも参加できるわ。いくらからかしら」「買ってどうするの」。

ムンクの絵

「ムンクの『叫び』が売りに出るそうよ。前に盗まれた事があったわ。ムンクは『叫び』を三、四枚描いている。版画も得意で、同じ構図の絵を色違いで作っている。大胆な黒と赤。ムンクは油絵も版画もできる天才だよ」「ムンクに詳しいですね」「一枚ほしいね」「ほしくありません」。

ピカソの絵

「ピカソの絵が競売にかけられて二百十五億円で落札されたんだって。こーんな感じの、こーんな絵よ」「それは、『アヴィニヨンの女たち』ですね」「よく知っているね」「有名です」「美術作品の落札額としては史上最高で、落札者は明らかにされていないそうよ。ほしいな。コーヒートのブルックスの社長さんなら、元の大井町の第一生命ビルに飾るために買うかしら?」「買いません」。

「任侠映画の主題歌」の会話

「高倉健さん主演の映画『網走番外地』は名作だわ。これ程の物とは思っていなかった。観なければわからなかった」「最初はカラーの予定だったけれど、ヒットが期待できないだろうというので、白黒になった」「刑務所の中だし、雪の草原だから、白黒でもいいね。むしろ白黒にしてよかった」「そうだね」「健さんの歌が好いわ。映画にピッタリだわ。「♪はるーかアー」と延ばす所や、「♪あばしり ばんがいーちイー」という節回しが好い。胸にグツと来るわ。健さんに本物のヤクザが頭を下げるのがわかるわ」。

すると突然、夫が『網走番外地』の主題歌を歌い出した。

「よく歌えるわねえ」「僕は小学生の頃、ラジオやテレビの主題歌を書きとめたノートを作っていた。『NHKみんなのうた』とか、何でも歌えるよ。リクエストをしてください」と、夫は調子に乗った。音大卒の妻の前で、よく歌えるものです。続いて藤純子主演の映画『緋牡丹博徒』を歌った。

「藤純子は声がいい。『緋牡丹博徒』が当たったので他の女優さんで何本か映画を作ったけれど、藤純子に勝つことはなかった。藤純子は、『私は歌は上手くないので主題歌を歌うのは絶対に嫌』と断ったが、『過去の主演者、鶴田浩二や高倉健も主題歌を歌っている』と説得され、やむなく承諾した」とても好いわ。映画にピッタリの歌だわ。ますます、緋牡丹のお竜さんのファンになってしまいうわ」「この時、主演の藤純子は二十二歳だった」「そうでしたか。大きな目、鋭くて色っぽい。きれいですね」。

「映画の中で一の子分いちこぶんが亡くなる時、『親分、五木の子守唄を歌って おくんなせえ』と言う。枕元で小さく歌うお竜さんの『五木の子守唄』が泣かせたね。私は号泣した。もう、涙、涙だった。あなたは泣かなかったの？ 私の後ろで一緒に観ていたでしょう」「さあね、忘れた」。

「記憶力」の会話

「今日の読売新聞に網走刑務所の囚人食が出ていたわ。ウチの昼食より豪華だったわ。見た？ おかしいな、神奈川新聞だったかしら？」「さあね」「出てないわ。ああ、思い出したわ、DVDの『網走番外地』の解説「北海道 作品を訪ねて 網走刑務所」に出ていたわ。ほら、ここよ」「そうでしたか、その解説は見たけれど忘れていた」「人の記憶ってあてにならないわね。時間とか場所とか見間違ひもありそうよ。それで似ているからと犯人扱いされたらたまらないわ」。

解説には、「現在の網走刑務所の昼食を再現した監獄食。博物館網走監獄で味わえる」と書いている。写真が付いている。一杯のご飯、ワカメの味噌汁、焼いたサンマに大根おろし付、ツナカンとキュウリの酢の物、干し大根の煮物。栄養のバランスはいいが、食べに行きたくない。

「網走刑務所博物館には、高校の修学旅行の引率で行った事があつたけれど、そんな食堂あつたかな」と夫が言った。記憶というものは、全くあてにならない。

「勉強」の会話

「童謡や唱歌の解説はウソばかり書いてある。特にネット上はひどい。出版社の編集の人が『ネッ

トの解説は「ゴミだ」と言っていたわ。当たっている。調査に時間がかかってしかたがないわ」「レコードのディレクターがメモ程度の物をまとめたり、大学教授が学生の書いた論文を確かめないで使っていたりするからだよ。たくさんの間違いがあるから、あなたが調査・研究をする余地がある。こうして勉強の日々が続けられるのでしよう。違っているということは、いいことです。ありがたいことです」「そうだね」。

「作家で童謡研究家の阪田寛夫さんでさえ『自分の感覚では』という、あいまいな文を書いている」。

「ネット上には、『僕は、楽譜が読めないのですが、多分そうだと思いますね。違っていたら、ゴメンです』などという、いいかげんな物がまかり通っている」。

「教科適用 幼年唱歌」二編上巻(明治三十四年)発行に掲載されている『うさぎとかめ(兎と龜)』の「小山」の歌詞は「こやま」と仮名がふつてある。楽譜も「コヤマ」。私が「こやま」と仮名をふつたわけではない。ところが高齡の研究者の中には、「記憶と異なる。僕の記憶では「ヤマ」と読んだ。ヤマと読んだ可能性は否定できない。池田説と異なるけれどヤマと訂正することに致します。あしからず御了承下さい」という強引なものもある。

苦勞して調査した新しい発見は、童謡の会で話す時、ワクワクする。それを聞くのを楽しみにして来てくれている会員も多い。勉強は楽しい。

「四ぶ」会話

「キヤー、カレンダーに！」「どうしましたか？」「あれ、ほらほら」「ゴキブリですか、なんでですか？」「動物よ」「四足よつあしですか？ 多足類たそくいですか？ なんだ、ムカデですね。これは赤頭あかずムカデです。外に出しましょう」。

私が急いで台所のドアを開けた。夫は貼つてあつたカレンダーを持って外に出て退治した。

「大騒ぎでしたね」「ビックリしたね」「しません」「一匹いたという事は、もつとウジヤウジヤいるのかしら？ ボディーは黒で、真つ赤な足が全部動いていたね。寝るとき布団にいたらヤダね」「湿つた所にいます。食器戸棚を開けたりしたからだよ」「突如、キヤーと言つたから、『ムカデ』という言葉が出てこなかったのがシヨックだわ。大きなムカデだったわね」「あれは普通です」「同時にカレンダーを持って私が開けたドアから素早く外に出たのが感動だったわ。もたもたして床に落としていたら大変な事になっていた」「そうだね。すぐにわからなくなつてしまふ」。

私は中学生の時、熱を出して一人で二階で寝ていた。ふと目を開けると白い壁を西から東にムカデが動いて行つた。そのムカデの大きさに驚き、声が出なかつた。金縛りだ。今日のムカデとは色が違つて、茶色のボディーに白い足、全部の足が動いていたのを覚えている。

「昔、ゴキブリが出て、キヤー」と言つて小学生の娘に抱き付いたら『お母さん、やめて、痛い！』と叱られた事があつたわ。小学生の娘は長身で、あばら骨が見えるほど痩せていた。ゴキブリも、やだよね」「ゴキブリもムカデも、騒ぐような事はありません」「ムカデは射すでしょ？」「咬みます」「やつぱりヤダよね」「たいしたことではありません」。

ムカデに關係する昔話を思い出した。「母親が危篤でムカデの息子は急いでいた。ワラジを履いて出ようとしたが足が多かったので時間がかかり、臨終に間にあわなかった。ムカデの子は泣いた。目が真っ赤になるまで泣いた。だからムカデの目は赤い」「そんな昔話、あつたかな?」。

「大きな犬」と「小さな犬」の会話

「大きな犬と小さな犬を連れた人がいたでしょう?」「さあね」「国道の歩道でハスキー犬とダックスフンドを連れた人を見て、二匹も飼っているのは、エサ代が大変だねって言ったでしょ?」「そうでした」「その続きは何でしたっけ」「それで終わりだよ」「終わりなの」。

ハスキー犬は、大股で歩き、のんびり空を見たり、車が展示してあるウインドーをのぞき込んだりしていた。一方のダックスフンドは、チヨコチヨコ歩き、御主人の顔色をうかがったりして余裕がない。時々、キョトンとして首を傾げたりして可愛らしくしていた。

『ゾウの時間とネズミの時間』のような理論につなげられないかしら」「つながりません。ゾウとネズミは違う動物です。ハスキー犬とダックスフンドは犬の仲間です。僕たちの場合、僕が大きくて、あなたが小さくても人間同士だから同じ時間を生きています」「そうか、残念だな」「でも、ハスキー犬とダックスフンドは、僕たちのようでしたね」「何が言いたいの」。

『ゾウの時間とネズミの時間』は、動物生理学を専門とする生物学者、本川達雄の新書（一九九二年、中公新書発行）。動物のサイズから動物のデザインの論理が数理的に解説されている。

◆コープの法則「同じ系統の中では大きなサイズの種は進化の過程でより遅れて出現する傾向がある」サ

イズの大きさは表面積と体積の関係から例えば体温を保つなど環境の変化に強いという利点をもっていることから説明される。逆にサイズの小さいものが系統の祖先になりやすいのは小さいものは一世代の時間が短く、個体数も多いので変異の確率が高いことから説明される。

◆島の法則「島に住む動物と大陸に住む動物とではサイズに違いが生じる」捕食者という制約がなくなると、大きな動物は小さくなり、小さい動物は大きくなる。

◆ベルクマンの規則「恒温動物では同じ種で比較すると寒い地方に住む個体ほど体が大きい」。体積と表面積の関係は幾何学的に相似な図形の場合は表面積は体積（これは体重と比例する）の $\frac{2}{3}$ 乗になる。エネルギー消費量と関係する酸素消費量と体表面積の関係はルブナーによって大きさの異なるイヌを使って確認された。

「好きな人」の会話

「困ったことが起きているわ。NHK朝の連続ドラマ『まれ』に俳優の中村敦夫さんが輪島塗の塗師屋の紺谷弥太郎役で出演していて、童謡の会員が勘違いをしているの。私が好きなのは木枯し紋次郎サンで、中村さんではありません。中には『中村敦夫さんと先生の旦那さんと似てますね』『やさしそうで、ステキですね』『かっこいい』と言って来る人までいるのよ」「そうですか」「あれほどハンサムでステキだった木枯し紋次郎も、年を取ると紺谷弥太郎になるね。一般人の私たちが年を取るのが理解できます」。

「あなたが好きな人は知っています。NHK朝の連続ドラマ『花子とアン』の花子の夫、村岡(演)

鈴木亮平)でしよう」(おや、誰にも言った事がないのに、なぜ知っているのかな。それとも、どこかでしゃべったのかな)。

「木枯し紋次郎も、村岡英治も英語がペラペラなんだよ」「僕も英語、できます」「知っています」。

「中村メイコ」の会話

昼のテレビ番組に俳優で歌手でタレントの中村メイコさんが出演していた。「私は父(作家・故中村正常)に言われたんです。『君には涙が似合わない。いつも笑っていないさ。美しい人なら、涙は似合うが』と。あとは言わなかったんですがね」。

すると一緒にテレビを観ていた夫が私の肩をポンとたたいて言った。「あなたには涙は似合いません。いつも笑っていないさ」と。

「タン壺」と「癒し」の会話

「あなたは、私のタン壺だわ。愚痴をこぼしながら生きて行ける。だから、いつも傍にいてください」「タン壺と言われるのは、やだね。何か他の言い方にしていただきたい」「何がいいかしら?」「さあ」。

「私は、あなたの癒しだわ。癒しは、イヤシイようで、いやだわ。何か他に言い方はないかしら?」「さあ」。

私、「ゆり坊」は、着ぐるみを着ていなくても「ひこにやん」や「くまモン」と並んでも引け

を取らない「ゆるキャラ」です。とても、ゆるい。

「覚えていなさ」会話

「急に思い出した事があるわ。でも、ほとんど覚えていない。松田町の小学校に行く通りに、風呂屋があつて、家に風呂があるのに父に連れて行ってもらつた。父は、一人っ子の私に何でも経験させようと一生懸命だった」「何歳ぐらい?」「それが、ほとんど記憶になくて、入口の下駄箱とか、大きなザルとかを断片的に覚えていゐるわ。お湯が熱いので、中に入れなかつたのよ」すると夫は私が思つてもいゝなかつた事を口にした。「男風呂に入れられましたね。そうに決まつている」と。それで話は終わった。

「とめどなさ」会話

「コンソコンおやつを食べるのを、やめていただきたい」「コンソコンなんて食べていないよ。堂々としたものさ」「おやつを食べるから三段腹になるのよ」「これは二段腹と言つていただきたい。三段の人に失礼です。」「ああ言えば」「こう言う」ので、夫婦の会話は延々と長引く。夫婦に会話がないうつ人があるが、理解できない。

夫を語る

夫は神経が細かい人なのか、のん気な人なのかわかりません。

夫は蜘蛛の研究者

夫は蜘蛛の研究を趣味にしています。毎月、千葉の市川市で行われているクモゼミという勉強会に積極的に参加している。雨の日も、風の日も出かけて行く。私が、「今日は寒くてインフルエンザが流行っているから休んだら」と言っても行く。よほど好きな事なのでしょう。インターネット上には、「ハエトリグモ研究センター」を立ち上げている。これは、バーチャルなので、全国から問い合わせが時々あるが、現地見学はできない。

平成二十七年（二〇一五年）三月、月刊『たくさんのふしぎ』『クモと糸』（福音館書店）が出版された。絵本なので絵描きさんとの交渉もあり三年がかりでした。本を読んで、蜘蛛に興味を示す子どもが増えるといいです。

これからは、専門的な研究論文を次々発表するだけでなく、蜘蛛を知らない人にも楽しく読んでもらえる本の出版を期待しています。自分で学んだ専門知識を、やさしく、わかりやすく次の世代に伝えることは重要なことです。

絵本の出版により、各地から蜘蛛の講演や観察会の依頼が来るようになりました。

夫は勉強が好き

夫は小田原市内の県立の女子高校に十五年勤めた後、横浜市にある神奈川県立青少年センター科学課に勤務した。仕事の後、「理科の勉強会をしましょう」と若手の先生方に呼びかけたが、みんな家庭第一で、仕事が終わった後、残って一緒に勉強しようという人はいなかった。独身の人も勉強しなかった。この時の夫の失望は大きかった。いつまでも怒っていた。夫は勉強が好きなので。

当時、子どもたちは中学生になっていた。この時期が、わが家が一番活気ある時だった。夫に合わせて家族全員五時起きをして朝食をとり、子どもたちは元気に学校に行った。学校へは毎日行くものと思っていた。昔から「親の背を見て子は育つ」といいます。子どもたちは、すくすくと成長して行った。

ある時、関西の教師の勉強会から、若い先生方に講演をしてほしいという依頼がありました。夫は何日もかけて準備をし、資料の大荷物を抱えて出かけて行きました。私は、このような勉強会が各地であるといいと思います。先生方が知識を出し合い、より好い教育現場になるといいです。勉強好きな先生が育つことを願っています。

夫は弁解をしない

仕事ができなかつたり、遅れたりした理由を人前で言うようなことはしません。他の男性が長々と弁解しているのを聞くと、腹が立ちます。弁解をして何になるのでしょうか。夫の仕事に対す

る集中力は目を見張るものがあります。次々仕事をして徹夜も平気です。過労死が心配です。

夫のアドバイス

私が結婚してからも暗い顔をしているので夫がアドバイスをしてくれた。「いやな事を書き出したらどうですか。書けば楽になりますよ」と。

日記をつけることにした。しかし、いやな事ばかりが書いてある日記を読み返すとガツカリして日記は三日坊主になった。

次に、カレンダーに好い日は○、いやな事があつた日は×を付ける事にした。子どもたちが風邪をひき、自分も風邪をひき、夫も風邪をひいて、春休みだというのに全員で寝込んだ。体がだるい、喉が痛い、頭痛がする。鼻水、鼻づまり。ゲンゲン咳をして、カレンダーは一ヶ月も二ヶ月も×で埋め尽くされた。

やりたくない事を書き出しても、やりたい事は見えてこなかった。夫のアドバイスはあてにならないかった。

夫は弱音をはかない

夫は弱音をはかず、いつも前向きです。何でも軽くこなして、あとはモーツァルトを聴きながら、本を読んだり映画を観たりしています。多趣味で余裕があります。

子どもたち夫婦も、私も尊敬しています。童謡の会員から「先生の旦那さんは、面白い人です

ね」と言われるのが、私は一番嬉しい。

夫はしづとい

夫は、しづとく食いさがる。いつまでも同じ話題に固執するので、嫌われることがあります。しかし、しづといので気にしませんし、気がつきません。他人がどう思っているのが平気です。その事を、娘たちが一番わかっています。独壇場になると、話しが止まらないので、家族は聞く側にまわっていますが、だれの顔にも「早く終わらないかな」と書いてあります。話は延々と続きます。日本語に、「うっとおしい」という表現がありますが、そこまでは行っていません。家族みんなが夫を尊敬しているからです。私が、そのように教育したからにほかなりません。家外では嫌われているかもしれませんが、心配です。

今日は、テレビのニュースで「ネパールの大地震」が話題になっていました。すると夫は人間の生存率について話し始めました。ニュースの方は五月五日なので画面が変わって各地の楽しい「子供の日」のようすを報道していましたが、夫はいつまでも「ネパールの大地震」について話していました。

夫は礼儀正しい

夫は「親しき仲にも礼儀あり」を座右の銘にしている。だれにでも敬語を使い、礼儀正しい。親戚、親、家族と話す時も丁寧です。高校まで山形県で育ったが山形弁は話さない。聞いたこと

がない。穏やかな標準語で話す。それ故、「ナヨナヨしている」と思われ、どちらかというとならから好意を寄せられるタイプです。

夫は反論する

夫は「そうだね」と決して言わない。私が「これは、まずい」と言うと、「そんな事はない。おいしいよ。まずいと言いながら、よくこんなに食べたね」と反論する。「あの赤いアオイの花は大きくて好きな花だわ。きれいな」と言うと、「バカでかい花は嫌いだ。どこがいいんだ」と言う。「下手な歌手だわ。のど自慢かと思った」と言うと、「昔、ちあきなおみが歌った『喝采』ですね。この歌は、非常に難しい歌です」と真面目に言う。私は夫が「そうだね」と言わないので話が長引き、イライラします。

ある日、「この富士山の絵は、なかなか良く描けているわ。気に入ったから飾っておこうと思うのよ。いかが？」と言った。ここで「そうだね」と言えば話は早いのだが、そうはいかない。「この絵のどこがいいんだ。一つもない所が無い。まるで銭湯のペンキ絵じゃないか、どこで拾って来たんだ」そのゴミ集積場にあったのよ。もったいないから拾って来たのよ。拾って来たつて、よくわかったわね」「そうだろう。さしずめ中学生が夏休みの宿題に描いたのを、母親が捨てたんだ。そうに決まっている」。ステキと思った絵は、一挙に下手な絵になった。すぐ、ゴミ集積所に返した。

夫は私の意見に対して「そうだね」と言わないので、論争になり、いつまでも話が続く。若い

頃は、私の膝に甘えようとしてやってきた猫が空を飛ぶような派手な喧嘩をしたが、今は時間があったので、先に「そうだねと言ったら」とか、「そうだねと言ったことがない」と言うのと、「そんなことはない。いつも、そうだねと言っているよ。聞いていないのか」と言い返すので、今度は、「そうだね」と「言った」「言わない」の論争に発展する。延々と時間がかかる。これほど何から何まで合わない夫婦はいない。結婚当初からなので、みんなが心配している。しかし、性格や意見の不一致だけでは離婚にならない。憎しみがないと離婚にならないものです。

夫は世間にとつ

「あそこで立ち話をしている人は、だれでしょう。若い人です」あの人は、隣りのおじさんよ。知っているでしょう？ 若くないわ、もう八十歳よ。キャップをかぶっているから若く見えるのよ」「そうでしたか」。

「NHKの女性のアナウンサーは髪を切ったのですね。すっきりしている」「違うわ、後ろで縛ってポニーテールにしているだけよ」「そうでしたか」。

「おや、あなたが新鮮に感じます。なぜでしょう」「草むしりが終わって汗をかいたから顔を洗っただけよ」「そうでしたか」という具合です。

夫は涙の壺を持っている

夫は悩みや苦しみが無いようで、十秒で寝ることができる。気分よく、いびきをかく。隣りに

いる私は寝れない。すると、夫がおかしな事を言い出した。

「二見、明るく元気に見える人も、『涙の壺』を持っていくんだよ。僕にも『涙の壺』があり、他人には言えない、妻にも言えない壺があるのです」と。

私は、教会の牧師さんの演説のようだなと思った。それを聞いている内に私の方が先に十秒で寝た。先に寝てしまえば、いびきに悩まされる事はない。先手必勝です。

ところで、夫は「涙の壺」に、どのような事をためているのでしょうか。「妻にも言えない」と言っていました。気になって眠れなくなりました。

夫は極楽トンボ

夫には、「極楽トンボ」という言葉がピッタリです。「地獄ではなく極楽とはいいいですね。でもトンボはいやだね。僕はトンボではありませんから」と、どこまでものん気です。私は、この「極楽トンボ」と楽しく暮らしています。ありがたいことです。

夫は今

平成二十七年（二〇一五年）十月六日、県立高校のスーパー・サイエンス・ハイスクールの科学講演会を頼まれました。高校一年生全員を体育館の床に座らせての九十分の授業です。

家で発表の練習を聴きました。私が、「生物の進化が庭の蜘蛛でも説明できることがわかりました」と言うと、「それが今回の講演の核心のテーマです」とのことでした。

「テレビで『サンダーバード』を観て育った子どもたちなので、もう少しテンポが速くてもいいのではないか。すると、「科学の授業で大事なのは疑問や質問を考えること。結論だけを早く教えても仕方がない」と持論を展開した。

夫は、平成十五年八月一日、「眼の進化に関する優れた高校教育への貢献」に対して日本進化学会から教育啓蒙賞を贈られました。持っている知識を伝え、理科の好きな生徒が育つことを願っています。

県立高校の理科の教諭だった夫は、「生徒の事を一番に考える先生」でした。生徒が大好きでした。私の誇りです。

今は高校の理科の教科書の執筆をしています。そして空いた時間に蜘蛛の研究や観察会の指導をしています。月の半分は山形の父親の仕事（サクランボやブドウの世話と収穫、雪囲い、雪降ろし）などを手伝っています。父親は（現在、平成二十七年）九十歳になりました。

私を語る

私と付き合うのは、とても難しい。「みなさん、ありがとうございます」。

着物の着付け

私は意外な一面を持っている。まず、「着物の着付けができる」と言うと、「え、ほんとう」と、

みんなが驚く。親戚に大きな呉服店があった。子どもの頃、時々連れて行ってもらい、店で遊んでいた。見よう見まねで着付けを覚えた。家では着物を着て、歌を歌いながらヒラヒラ踊るのが得意だった。来客があると歌って踊った。正月に必ずやって来る、父と母の仲人さんが、「うまい、うまい」と手をたたくて喜んだ。テレビに出演している演歌歌手が着ている着物の肩や裾の柄、帯や帯留めにうるさいのは、そのためです。

「藍染め」にも興味がある。小田原にある藍染工房に、小学生の子どもたちを連れて体験実習に行ったこともあるほどです。

成長した娘は、着物の着付け教室に通って免許皆伝の腕前になった。成人式の時、頼まれて着付けのアルバイトをする。手に職があると引つ張りだこです。

裁縫が得意

次に、「裁縫は得意です」と言うと言いた人は驚く。ボタン付け、カギ裂きの修理、ズボンの裾直しなどは、夫が出かける前の短時間でもできる。私が毛糸編みやレース編みをしているのを見た夫が、「そんな事もできるのですか？」と不思議がった。洋裁、和裁の基本的な事は、ほとんどできる。

母の妹が家で着物や洋服を縫って生計を立てていた。人にも教えていた。小田原にあった裁縫の女学校の生徒が大勢宿題の布を持って来ていた。母の妹は、裁縫の腕前は素晴らしかったが、教えるのは素人なので下手だった。そのため、教えるのではなく、自分で縫い上げてしまった。

その結果、女学生は学校でほめられ大喜びだった。次々女学生が訪れ、裁縫教室は大盛況だった。しかし、収入は、ほんのわずかだった。針仕事だけでは生活は成り立っていなかった。女学生たちは、裁縫の宿題をやってもらって良い成績をもらって卒業したが、裁縫の腕前は、まるでダメだった。しかし時代が進み、お金を出せば、いくらでも安くてカッコいい洋服や着物が手に入るようになった。今や、裁縫は誰もしなくなった。針や糸を持っていない女性も多い。昔は手先が器用な人が多かった。母の妹は、縫物や編物をする手つきはリズムカルで、隣りで見ているだけで楽しかった。

ある時、秦野市文化会館に、ピアニストのリリー・クラウスが来た。家族で聴きに行った。リリー・クラウスは、おばあさんになっていたが、モーツアルトの演奏は、すばらしかった。みんなで感動した。夫が、「山形にも来たことがあります。僕はレコードを買って聴いていました」と得意そうに言った。

アンコールが終わっても花束がなかった。私はその時、ピンクの三角ショールを編んでいたので、完成させて持つて行って渡したかったな、と思った。今でも、時々その事を残念に思っている。三角ショールになるはずの物は、現在、台所の椅子のクッションになっている。

テレビ時代劇『木枯し紋次郎』で、紋次郎（演…中村敦夫）は裁縫をする。道中合羽の破れを自分で縫う。それを見た、お光（演…村松英子）が「うまいもんじゃあないか。器用な手つきだよ。女みたいだ」と、ほめる。最後に「コブ」を作ってから歯で糸を切る。振り分け荷物に針と糸をしまうシーンの、長い指が感動的に美しい。「どうしよう？ 惚れちまうぜ！」。紋次郎サン

は几帳面な人です（第十八話「流れ舟は帰らず」第一シーズン最終回）。平成二十四年は『木枯し文次郎』放送開始四十周年になります。

魚をさばく

「お母さんは、魚がさばけていいね」と娘が言う。三枚に下ろしたり、頭と内臓を取って開きにする。「こんな事、だれでもできるよ。簡単だよ」。

同級生の家が、近所で魚屋をしていた。私は毎日のように遊びに行った。「見ているうちにできるようになった」と言うと、夫が「見ていただけで魚がさばけるようになったとは、すごいね」と言った。「普通だよ」と思ったが、マーケットで、「開いてくれる」とか、「焼き魚用に内臓を取って」「三枚に下ろして」「刺身にして」と魚屋に注文している人を見かける。できない人が多いようだ。しかし、娘たちが魚をさばいているのは見たことがない。

その近所の魚屋さんが幼なじみの友だちと私の家に遊びに来た。母が江戸前寿司を取り寄せて出すと、一人は「美味しい」と言って食べたが、魚屋さんは、「刺身は嫌いで食べない」と言った。魚を毎日扱っている魚屋さんは、魚を食べるのが嫌いな人だった。

マーケットの魚売り場で、大きなワカシを一匹買った。新鮮でおいしそう。頭を切って、内臓を取り、三枚に下ろした。そして塩をふって焼いた。焼けた魚は小さくなった。

「頭と内臓を取って焼いたら、こんなに小さくなっちゃった」「焼いたから、肉がちぢんだんだよ。あなたの責任ではない」と夫は言い、インドネシアの民話を話してくれた。

「男が大きな魚を釣って来た。奥さんは魚を焼いた。すると魚は小さくなった。それを見た夫は、奥さんが食べたから小さくなったのだらうと思ひ、奥さんを殴り殺してしまつた」。

「奥さんを殴り殺してしまつたというのは、すごいね」「食い物のうらみは恐ろしいんだよ。小さい頃、親戚の人が持つていた本を借りて読んだ。それで覚えてゐる。あなたは、魚が焼けて小さくなつたぐらいの事で、夫に殺されなくてよかつたね」「そうだね」。

このインドネシアの民話は、結婚以来何度も聞かされてゐる。夫は話した事を忘れてしまふようです。

胃の検査

私は、絶對的な自信を持つてゐるものがある。「胃癌、食道癌にはならない」といふ思ひ込みだ。町の健康診断に行つた。胃のレントゲン検査。先生が「バリウムは、何味がいいですか。イチゴ、ミカン、パインがあります」と言われた。「イチゴをお願いします」「バリウムを半分飲んでください。ゲップを出さないようにしてください。はい、右を向いて、左を向いて、また飲んで、上を向いて、全部飲んで息を止めて。はい、終わりです」「ありがとうございます」「待合室で、結果が出るまで、しばらくお待ちください」。

待合室には、患者が三人いた。しばらくすると呼ばれた。レントゲンのフィルムが数枚並べてある前に先生と、インターンの人が二人いた。「ここに影が出ると食道癌、この辺に多いのが胃癌、この人の場合、食道から胃にかけて何も無い。特に胃は、模範的な美しい形をしている」。インター

ンの人たちは、「すごいですね」「すばらしい」と言い、メモを取りながら聞いている。真剣だ。そのファイルの胃は、テレビの胃腸薬の宣伝の胃の形をしていた。「あの、私はどうしたらいいですか」「結果は二週間ぐらいしたら町のほうにお尋ねください。では」「ありがとうございました」。何が何だかわからないまま、しばらく待合室で待つてから料金を支払い、バリウムを出すための下剤をもらい帰宅した。バリウムは下剤を使わなくてもスルリと出た。健康体です。

帰宅して鏡を見て驚いた。口のまわりにバリウムが白く付いて固まっていた。まるで、昔話の人肉を食らった鬼ババアだ。医者も、看護婦も、インタン生も、受付の人も、さらに待合室にいた患者も、私の顔を見ていたはずだ。私は笑った。結果は町役場に行き事しなかった。この胃のレントゲン検査は四十代の時の事です。五十代の時、秦野赤十字病院で人間ドックを受けたが、異常なしだった。私は「ほらね」と思った。その後、町の病院は先生が病気になる閉鎖された。先生は癌で亡くなったと聞いた。

誠意をつくす

私は心がけていることがある。「失敗したら誠意をつくす」ということです。失敗をしない人間はいない。失敗をしてしまったら、誠意をつくして一生懸命やり直すのです。

しかし、実際には、どんなに誠意をつくしても、失敗は取り返しがつかない。失われた時間は取り戻せない。逆回転はない。人は皆、負の感情をため込んで生きて行く。

新美南吉の童話『ごんぎつね』が、それを物語っている。「ごん、いたずらをして悪かったと

反省して、それからは一生懸命生きたのにね」。ごんは、小さくうなづいて息をしなくなった。死骸の上には青い空が広がっていた。だれもが、すぐに「ごん」の事を忘れた。小さい一生だった。

「押し取り刀」を持っている

昔から大慌ての表現に「押し取り刀でかけつける」というのがある。ひどく急いだために、刀を腰にささないで、手に持ったままの状態だ。

長女が肺炎になった。左右の肺のレントゲンは真っ白で危険な状態だった。診察に行った病院に即入院した。私は、押し取り刀で病院に駆けつけた。病院はタクシーで二十分の所にあった。途中のスーパーで見舞いの品を買おうとしたが店は開店しているのに、売る物がほとんど並んでいなかった。薄暗くて悪臭がするような店だった。店頭にあったデコポンを一皿買った。「病人の見舞いです」と言うと、店の人が新聞紙に包んでくれた。長女はデコポンを大喜びで「美味しい」と言って食べた。その後、快復し職場に復帰した。

次女から電話があった。「お腹が痛かったので診てもらったら即入院になりました。遠いから来なくていいです」と。私は、とりあえずパジャマとバスタオルなどを買いそろえ、翌日、押し取り刀で病院に駆けつけた。病院は千葉県流山だった。遠い。小田急線の新松田駅の駅員に行き方を教えてもらった。若い駅員は乗り換えを紙に書いて、丁寧に教えてくれた。三回も乗り換え

があった。行ってみると、友だちが入院の準備をしてくれて、手術はせずに点滴でようすをみるとのことで、元気そうだった。同じ病室には、手を縛られた老人や、眉毛に入れ墨をした女の人がぐったりして横たわっていた。「この病院は恐ろしい病院だよ」と娘が言った。娘は一週間後、自分で退院した。「大腸憩室炎、腸が詰まった状態、原因不明」との事だった。

孫が保育園に入園した。途端に風邪をひいて、鼻水が出る状態になった。鼻水は、いつまでも続いた。「病院に行き、完全に治さないといけない」とアドバイスした。入園したばかりの保育園を長期欠席した。続いてママが職場に復帰した。途端に孫はロタ・ウイルスに感染した。これは困った。ロタ・ウイルスは、六歳までの子どもがかかる病気のナンバーワンで、だれでも感染する。また、保育園を長期欠席した。娘から「お願い、お助け」とのことで、押っ取り刀で藤沢の家に駆けつけた。病状は回復に向かっていたが、見知らぬ「おばあさん」と「おじいさん」に孫は警戒して泣き、ママを探し求めて抵抗し続けた。夫が抱きかかえると、泣きやんで眠ったりしたが、降ろすと再び泣きじゃくった。夫は抱いていた腕が筋肉痛になった。パパが会社から早目に帰宅した。みんなの協力で、なんとか五月の連休に突入し、救われた。

少しの熱や風邪の症状がある時、保育園に常駐する看護婦が対応してくれるとずいぶん助かるのではないかと思った。代わりをお願いできる人がいない場合は深刻で、職場を退職せざるをえない。まだまだ一般的な職場では子育てに理解が乏しい。早期に「病児保育サービス」を充実させていたきたい。

全国の保育所で二〇〇四年から十四年に起きた事故で、少なくとも百六十三人の子どもが死亡した事が厚生労働省のまとめでわかった。年齢別では〇歳児が半数を占め、認可外保育施設での事故が約七割に上った。子どもが睡眠中のケースが多かった。病死、乳幼児突然死症候群（SIDS）、窒息死（うつぶせの状態）、死因不明など（平成二十七年五月六日の神奈川新聞による）。

かわいいそうな子ども

私は、小さい頃の記憶がほとんどなく、残っている写真や聞いた話によると、最初は三、四人の子守の少女が住み込みでいて、面倒をみていたようです。その少女たちは父の教え子で、知的障害があり、働く場所がなく自分の生活もやつとでした。私は、食事が与えられず栄養失調となり、風邪をこじらせて肺炎になり、下痢が止まらず痩せ細って死にかけました。さらに、トラホームの少女が、自分で使った手ぬぐいで私の顔を拭いていたため、トラホームが移り失明しそうにもなりました。イスや滑り台から転げ落ちて頭を打ったり、ブランコに当たって骨折したりと、散々だったようです。よく育ったものです。

その後、長く私の世話をしてくれたのは、カッチちゃんという人でした。この人は普通の娘さんでした。カッチちゃんは、夏休みや冬休みに暇をもらって家に帰っていました。家は国府津で、御殿場線の松田駅から乗車し、駅前の「梅月堂」で買った「十文字最中」の菓子箱を、相模金子駅の手前の踏切の所で待っている私に、汽車の窓から投げてくださいました。それは小遣いを渡し、母がやらせていたものでした。嬉しい思い出です。

幼稚園や小学校にあってからは、母の妹の家にも世話になりました。私は鍵っ子の先駆けという事になります。母の妹は、私を「ことのほか大切」にしてくれました。「大切」にしてくれた理由を知ったのは、この人が亡くなってからです。

私は、オタフク風邪以外、大きな病気をせずに大きくなりました。普通の風邪では、病院に連れて行ってもらおうというのではなく、家で一人で寝ていました。庭には、大きなタイサンボクやサルスベリの木があり、その花を眺めて寝ていました。それで、いつも治ってしまいました。歯医者にもほとんど連れて行ってもらわなかったもので、虫歯が沢山ありました。私は歯医者が嫌いで、治療ができないほど泣き叫び暴れました。歯医者は、ほとほと困ったようです。

母は二十年の小学校教員生活の後、退職しました。退職してしばらくすると、自分の母親の介護が始まり、どこにも出かけられなくなりました。介護は家で父と母がしていました。母が食事の世話やトイレの世話をして、父が車で、毎日病院に連れて行きました。最後は、病院から先生が点滴やタンの除去に往診に来てくれました。自分で入浴できなくなると、父が抱きかかえて一緒に入り、母が介助しての、文字通り二人三脚の介護でした。寝たきりの状態は七年以上になりました。家の中から笑いが消え、だれもが次第に無口になりました。

洋ランの栽培を楽しむつもりで建てた二棟の温室は、そのままになりました。介護が終わって気がつけば、自分たちは年老いてしまっていました。温室で洋ランを育てて楽しむ元氣は、もう無くなっていました。花が好きな母は、洋ランに囲まれた老後が夢でした。この介護は、私が高校生から結婚した年まで続きました。私の青春時代と重なります。だから、私は過去を思い出し

たくないのです。

「今はどうですか?」「今は、とてもいい生活です」「それは僕がいいからです」。

今ある幸せ

百三歳の美術家・篠田桃紅さんが自伝エッセイ『百歳の力』の中で、「結婚は、くじ引きみたいなものと考える」と言っている。「そうだったのか」と私は思った。「結婚はくじ引き」というのに心当たりがある。

私の見合い結婚は、くじ引きのようだったが、今ある幸せは、くじ引きで得たものではない。お互いを理解し合うという努力があった。それは、簡単ではなかった。

二人の人が好く似合っていて、好い組み合わせだという時に使う熟語に「好一对」というのがある。夫から「妻あればこそ今の僕がある」と言ってもらえるような好ましい一組になりたい。

感動の童謡・唱歌

童謡や唱歌には、こんなに感動がある。

「にれっくひなまのう」

サトウハチローの童謡は、新鮮で明るく楽しいものですが、ほとんどは自分が子どもだった大

正時代を懐かしみ、その時代に引き込む作風です。『かわいいかくれんぼ』『とんとんともち』などがそれです。作曲は中田喜直。

『うれしいひなまつり』は、写実なので、他に見られるような「自分が子供になってしまいうな詩」ではありません。「子供の演歌のような感じ」で、保育園や幼稚園の季節の行事の歌として歌うには、歌詞が長く難しい。しかし、どの童謡にも劣らない、すばらしいものです。この歌以上の雛祭の歌が生まれてこないことから納得できます。

雛人形を買ってもらえない子どもにとっては、この歌を歌ったり踊ったりすることで、なぐさめにもなっていました。

テレビから曲が流れると、ハチローは「おい、切れよ」と不機嫌になり、晩年まで「だれか、これにとって代わるひな祭りの歌を書いてくれないかなあ」とぼやいていたそうです。いやがっていた理由は、「言葉遣いがハチローらしくない。『お嫁にいらした』（二番）と、身内のことに敬語を使っている点が、後々もひっかかっていた」などがあげられている。

もつと踏み込んで歌詞を見ると、お雛様を段に順番に並べるときに、この歌を歌いながら並べていきます。すると、この歌詞はお雛様をただ並べただけだということに気づきます。詩人はこのような羅列を好まなかったのではないのでしょうか。

一番では「おはなをあげましょ もものはな」「はな」が重なっています。ことばのねりこみ不足という感じですが、二番では「すましがお」「しろいかお」と「かお」が重なっています。「かお」に注目する傾向は三番でも「あかいおかお」と続きます。

四番は雛人形の描写から突然離れて女の子自身のことになります。しかも雛人形に合わせて、和服を着なければなりません。おしつけがましいと思う子どももいそうです。願望の姿であって実際に着る着ないは関係ないのですが、詩人はそうとは思えなかったのではないのでしょうか。歌詞は、もう少し工夫の余地があったような気がしてきます。ヒットしたからいい、歌われているからいいという気持ちにはならないハチローの詩人としての姿が見えてくるような気がします。

さらに、「お内裏さまとおひなさま」とあるが、正しくは男雛（おびな）と女雛（めびな）で、男女の人形一対を指して内裏雛（だいらびな）という。また、赤い顔は右大臣でなく左大臣の方。歌が広まるとともに間違った言い方も広まってしまった。ハチローは自分の間違いに気がついていたに違いありません。

【音読み】

海野厚うんのあつしは本名を厚一こういちといい、四男三女の長男でした。一番の歌詞は、厚が十七歳年下の末弟の春樹の気持ちに成りかわって作ったものです。

詩は七・五調でできているから、「きよ・ね・ん・の」だと四文字で字足らず。「をととしの」と五文字にした。同じように「きのうくらべりや」の所も、「きよう」でもよかったが、「きのう」としたのは、七文字の文字数の関係から。

厚が句作に没頭していたので、できた詩です。「をととしの」、「そして「きのう」という言葉を書いた時、自信作となりました。

二番の一行目の「柱に凭れりや」は八文字で、完全な七・五調になっていません。厚が「場合に依つては、一節の歌だけで充分と思ひます」と言っているのは、そのためかもしれません。代表作『七色鉛筆』『赤い櫓』は、七・五調です。自信作だったに違いありません。

二年前の節句の時、兄に計ってもらった背の高さが柱に傷となつて残っている。その傷を見て、自分は大きくなったものと思っていたが、昨日（二年後）、兄と比べてみたら、何のことはない、自分の背の高さは、やっと兄の羽織の紐の位置（ちょうど胸乳の位置）まで届いただけだった。兄さんのような立派な体格の大人に早くなりたいなあというものです。

『子供達の歌 第三集 背くらべ』（白眉出版社）大正十二年五月二十八日発行の表紙は兄の「羽織の紐」の位置に弟が描かれている。「羽織の紐を成長の差を測る物差し」のように使う「羽織の紐」の長さ説は、一般に圧倒的な支持を得ているようですが、表紙絵（装幀・諏訪かげよし）を見れば、「羽織の紐」の長さ説は間違いとわかります。

海野家の菩提寺、静岡市の法蔵寺ほうざうじにある「天の川」は、清々しい立派な詩碑です。詩の左下には、次のような説明が書いてあります。「天の川は 北原白秋が「赤い鳥」誌上で激賞した厚初期の作で作品群の原点に位置する」。

天の川

海野厚

白い鳥 白い鳥

白い鳥 二つ

天の川 わたれ

わたった わたった

仲よく わたった

伴野薫（厚の姪）さんからの手紙によると「碑は、姉と私が母・三千代の供養のために建てました。除幕式に間に合わせたくて私が岡崎の山奥まで石屋さんと行き見つけました。（富士山の形）をしています」と教えていただきました。私は、ますますこの碑が好きになりました。

『おもちゃのマーチ』

おもちゃが、楽しく行進しているようすを歌ったものです。擬態語の「やっこ」は、たどたどしく動き出す、おもちゃの登場です。擬声語の「ラッタッタ」は、元気に行進しているようすを表しています。

「勢ぞろへ」は、楽譜も「せいぞろへ」なので、初出に忠実に「せいぞろへ」と歌う人があります。しかし、『一ねんせいのおんがく』（教育芸術社）昭和三十年発行では、「せいぞろい」になっているので、以後「せいぞろい」と歌われるのが一般的です。

「お馬」は、昔の童謡歌手は「おんま」と歌いました。当時の子どもたちは馬を指さして、「あつ、

おんまが通るー」と言ったものです。

「犬(わんわ)」は、幼児語。この歌をかわいくしています。「こいぬ」になっている楽譜があります。「一ねんせいのおんがく」(教育芸術社)昭和三十年発行では、幼児語に対する、教育的配慮をしたため「こいぬ」にしたのでしよう。しかし、現在では、最初から歌われている「わんわ」が定着し歌い継がれています。

「キューピーも、鳩(ぼっぼ)も、ラッタッタ」は、楽譜も「ポッポ」となっている。海野厚は、「鳥」特に「鳩」が好きで、「鳩の笛社」同人童謡集のマークは「鳩笛」が描かれている。「ポッポ」は、汽車ではありません。

最後は「キューピー」や「フランス人形」が登場し、笛や太鼓が鳴って夢の世界へ誘います。太鼓の音を擬声語の「パンパラパン」と表現したのは新鮮に聞こえます。「やつとこ、やつとこ」「ラッタッタ」「パンパラパン」どの擬音も、他の童謡にはなくユニークで、面白い。

『故郷』

だれもが『故郷(ふるさと)』と読みます。文部省唱歌の中で最も知られ、人気があるからです。しかし、近年「ふるさと」は、新聞その他の出版物では、圧倒的に「古里」と書く方が多くなっています。「故郷」は、「こきょう」と読むからです。

歌詞は文語体で、三・三・四(六・四)調のリズム(音数律)できています。これが、美しい詩を作り上げています。六・四調は、三拍子の歌に都合が良いもので、西洋の唱歌にも多くの例

があります。

「忘れがたき」は、忘れられないという意味です。手話では「忘れる」＋「敵討ち」と教えていただきましたが、この解釈は間違いです。その場にいた百人以上の人々が、そのように教えられた手話を覚えて帰宅してしまいました。

「恙なしや友がき」は、友だちは元気でいるだろうか。「恙なし」という言葉は語源由来辞典によれば「ツツガ」＝「病気や障害」がないという意味です。ダニの一種ツツガムシによるツツガムシ病は、佐々学著『風土病との闘い』（岩波書店、一九六〇年発行）で知る事ができます。現在でも手紙文に「つつがなくお過ごしですか」は、使われています。

「思ひいづる」は、思い出すという意味です。「山はあをき」の「碧い」はブルーではなく、山里のグリーンのことです。

三番は「立身出世の目的を果たして、いつ、その故郷に帰れるのであろうか」という、やや不安な思いを意味して結ばれている。「いつの日にか帰らん」は、古典語としては、不定詞「いつ（の日にか）」があるので疑問文になる。それを現代語の「いつか」という未来の不特定の時を指している副詞と受け止め「いつの日にか、立身出世して帰ってこよう」と誤解している人が多い。「いつの日にか帰らん」の「ん」は、意志の助動詞ではなく、推量の意味の連体形という形で、「……ことができるのであろうか」という意味を担（にな）っているのです。「らむ」は「らん」と表記されることもある。

心地良い優しい旋律は、讚美歌のようだと言われます。しかし一般の文部省唱歌がそうである

ように、子どもが歌って楽しむための歌ではありません。文部省唱歌は、大人向けに作られたからこそ、大人になってから好きな歌とされ、愛唱され歌い継がれるのです。

『尋常小学唱歌』（全六冊）の編纂は、歌詞委員と楽曲委員に分かれて任命された。合議制だったので、発表当時は作詞・作曲者名は何も書いてありませんでした。

「四季に関係なくいつでも歌える」と思っている人が多いようですが、尋常小学校第六学年が夏に歌うように作られたものです。思い出の風景、懐かしい人々、強い郷愁を胸に秘めつつ、仕事があつて、この夏は帰郷できないという境遇を歌詞にしてあります。

ずっと子どもたちに歌われていたと思われていたこの歌は、昭和十七年発行の音楽教科書には掲載しませんでした。戦時下の国民学校では歌わせていませんでした。

満洲も日本の領土でした。新天地を求めて長野、山形その他大勢の人々が移住しました。満洲では本土と違う教科書で教育をしていました。引き揚げてきた人々は、日本に帰国後、『故郷』を覚えて歌いました。私の童謡の会には、満洲から引き揚げて来た人や従軍看護婦じゆうぐんかんごふだった人がおられました。童謡の会で歌にまつわる話を聞く事は、重要と思います。

戦後、再び『六年生の音楽』（文部省）昭和二十二年発行に掲載された時、曲名が平仮名で「ふるさと」となりました。二十二年版の教科書には特筆すべき事がいくつかあります。

まず、歌詞は文語体のままになっています。文部省は、例えば「如何にいます父母」を、「どうしていますか パパママ」というように口語体に直したのでは、品格がなくなる事を承知していたのです。この事は、すでに藤田圭雄が論文として発表しています。

一音低くと長調からへ長調に移調してあります。子どもたちは、広い場所で思い切り声を出して遊ぶ生活が少なくなると、しだいに小さい声で話すようになり、声域も狭くなってしまうました。一音低くしたのは、高い「ミ」の音を避けるためですが、作曲者が意図した調性が違うと、曲としての印象も変わってしまいます。

文部省は昭和二十二年、新主旨にもとづく編集による音楽教科書を発行しました。この時はじめて作詞者と作曲者の名前を明記しました。作者の名が公表されたのは、マッカーサー元帥の指令によるものです。戦前の文部省唱歌の多くは「不明」と記されました。

昭和四十七年（一九七二年）、高野辰之の養女の高野弘（当時六十五歳。東京都渋谷区代々木）が、音楽著作権協会に、高野辰之が「ふるさと」の作詞者と名のり出しました。音楽著作権協会は、高野の知人などの証言をもとに高野の作詞と認め、同協会の著作権名簿に登録しました。

作曲者とされる岡野貞一の自宅（東京）は終戦直前の空襲で焼失し、直筆の楽譜や日記などの一次資料は残っていない。そのため「故郷」を作曲したかどうか調べられなくなりました。しかし、鳥取出身の作曲家・田村虎蔵が「岡野貞一君の作」と認めました。田村と岡野は同郷。

『小学生の音楽 6』（教育芸術社、平成四年発行）を見ると「文部省唱歌 高野辰之作詞 岡野貞一作曲」となっています。教育芸術社に問い合わせた所、「文部省は、平成元年三月に発行した小学校学習指導要領から岡野貞一を作曲者としている。これに伴い、平成四年発行の教科書から作者名を記載」と教えていただきました。今、全ての教科書は「文部省唱歌 作詞・高野辰

之 作曲…岡野貞一」となっています。へ長調で掲載。

作詞者が判明した事により、『故郷』は、高野辰之の故郷である信州の山里の風景をイメージして作詞したものとされました。高野辰之記念館によると、「斑川は清流で鮒はいませんが、詞は創作ですから「小鮒」となっています」と教えていただきました。斑川は、高野辰之が子どもの頃は、カジカやヤマメなど清流にしか棲まない川魚がたくさんいたという。『故郷』の歌詞は「小鮒釣りし」です。他の歌詞は高野辰之の生活と一致しているのに、ここだけ創作して「小鮒」にしたというのは奇妙です。

私は、合議制で作られた曲は、文部省唱歌としておくべきだと思います。

夫婦のビジョン (vision)

平成二十七年(二〇一五年)五月二十八日、ノーベル生理学・医学賞を受賞した京都大iPS細胞研究所の山中伸弥教授が京都大学で講義を行った。教室には定員を三百人超える約八百人が詰めかけた。学生は何を求めて集まったのか。

まず、「当時はやりのアイポッド(iPod)からもらった」と、iPS細胞の名前の由来を披露した。そして「若い内に海外に出て、一生追い求めることができるビジョンを見つけてほしい」と語った。一生追い求めることができるビジョン(未来像)を見つけることは、なかなか難しい。

大学を選ぶ時点で何をしたいか決めている人は少ない。音楽、体育、美術の分野で才能を見い

出せている人は一握りにすぎない。

大学ではどうだろう。大学生になっても将来の目標が決まらない人が多い。その証拠に、教師にでもなるうかと教育実習に行つて、向いていないと挫折するケースがある。

一生追い求めることができるビジョンが得られなかった場合、大学を卒業し、会社員になり退職すると何もやることがないと嘆くようになってしまふ。もう少し学生気分を味わつてから考えようと大学院に行つても同じ事です。

だから山中教授は学生に「一生追い求めることができるビジョンを見つけてほしい」と語るのです。私には童謡や唱歌の研究、夫には蜘蛛の研究がある。一生追い求めて行く。

韓国ドラマ『イ・サン』の会話

みんなが観て、感動した。

「消燈時間」の会話

「あら、もうこんな時間だわ。先にお風呂に入りますか」「いや、まだ仕事がある」「美智子皇后様は、十一時には寝るように心がけているそうよ」「十一時とは遅いね。何をしておられるのでしょう」「きつとテレビを観ているのよ。ドリフターズとか、ダルビッシュとか」「ドリフは無いと思うけれど、スポーツはチェックしていると思うよ。天皇陛下が、園遊会で、なでしこジャ

パンの監督に、「キーパーのセイブは、すばらしかった」と言われていたから、きつと九時のニュースを観てから、お風呂に入つて寝るのさ」

「私は、日曜日は忙しいのよ。『童謡の会』があつて、家に帰ると『相撲』を観るでしょう、それからNHK『七時のニュース』、続いて『ダーウィンが来た』を観る。カワネズミがおもしろかったわ。それからNHK大河ドラマ『平清盛』を観る。平清盛の弟の家盛が、「兄上、兄上」と言つて、やけに素直で心配だわ。それから韓国ドラマ『イ・サン』を観る」「テレビ漬けですね」「新聞の投書欄に、最近のテレビは、観る物がないと書いている人があつたけれど、そんなことはないわ。みんなおもしろいわ。でも、『イ・サン』は、夜十一時からだから、終わると明日になつてしまう。それからお風呂に入つて寝ると、月曜日はブルーマンデーよ。毎週の事だから、ねむねむのねむねむで、もういい加減に勘弁してもらいたいわ」「それなら観なければいいでしょう」「童謡の会員にも言われたわ。去年の十二月末に王妃の陰謀が発覚して終わりかと思つたら、童謡の会の人、『私はDVDを買つて持っている。貸しましょうか。今放送している所は序の口よ』と言つていたから、これからも、まだまだ続くらしいわ。私は、カン・ソッキというイ・サンの護衛部隊の人が気に入つていて、観ているのよ」「そうでしたか。知りませんでした。あなたの知人がDVDを買つたというのもしすごいですね。その人は、『イ・サン』のファンですね」

イ・サン役の俳優さんの名前は「イ・ソジン」という。まるで、うがい薬「イソジン」(株式会社 明治の商標名)のような名前だ。

「火薬事件」の会話

「火薬でイ・サンを殺そうとたくらんだ部分がよくわからなかったわ。箱には番号が書いてあった。火薬を、どれに入れて、どれに入れなかったか。犯人の男が運んだ箱が何番だったか。よく観ていたのに、わからなかったわ。再放送があったら、また観たいわ」「その部分は、はっきりわからないような演出になっていたのさ。観ている人に、ここで爆発しなくて、次に爆発すると、はっきりわかってしまったら面白くないでしょう。あなたのように不思議がる人がいるから、ドラマとして面白いのです。どうなるかと手に汗握って観たでしょう」「なるほど」。

「つき合いきれない」会話

『イ・サン』平成二十四年三月十八日の放送。

「昨日は、王様が亡くなり、まだイ・サンを殺そうとする人がいて、絵師に混じって宮殿に入る。その時は、剣を持っていなかったのに、剣を通路の下に隠すシーンがあり、イ・サンが「そこで、何をしている」と尋ねる所で、続くなったわ。剣は、どこに隠し持っていたのかしら？ また見逃したわ。刺客は強そうだったわ。護衛のカン・ソッキもかなわないかも。カン・ソッキには奥さんがいるから、殺されたら嘆くわ。心配だから、また観るようよ。ソンヨンがイ・サンの父の肖像画を描いて、ほうびに王様からもらった指輪も気がかりだわ」「僕は観ていないから、何がなんだかわかりません」「このドラマは、おもしろいのよ。みんなが観ているわ。でも十一時からの放送では遅いから、イ・サンには、これ以上つき合いきれないわ。いつまで続くのかし

ら」「やれやれ、おかしいねえ」。

この日、寝たのは翌朝の二時となった。夫は、すでにいびきをかいて寝ていた。一緒に住んでいても、イ・サンのおかげで、すれ違っている。

「刺客」の会話

『イ・サン』平成二十四年三月二十五日、『即位の日』の放送。

イ・サンが王位につき、めでたく完結かと思いきや、刺客は警護が厳しかったので計画を悟られたと知り暗殺を中止した。それは作戦で、その夜、手薄になった所でイ・サンを襲うために宮殿に忍び込みイ・サン部屋の部屋に近づいた所で、また続くとなった。

刺客は絵師に化けて、真夜中、一人だけ絵の修復作業に宮殿に来るという設定には無理がある。足が悪くて歩くのに時間がかかったからと弁解するので、警備をしていた兵隊はだまされてしまふ。これも、おかしい。刺客は剣で門番や取次の人や側近を殺した。武器を持たない人も、女も殺した。「スパーツ、シャキーン」という一瞬の動きで、人が死んだ。「おお、よく切れる剣だなあ」と思った。ドアの向こうでは、イ・サンが書物を読んでいる。書物を閉じる時のイ・サン役の俳優さんの指が長くてきれい。私はピアノ教室の先生をしていた職業柄、容姿ではなく、指の長さや太さ、爪が切つてあるかを注意深く見る癖がある。

イ・サン危うし！「来週も観なければいけないわ。イ・サンの所に行つて刺客の事を知らせたい気分よ」「主人公は死なないんだよ。死んだら話が続かない」と夫が平然と言った。「そうです

よね。」

「危うし」の会話

『イ・サン』平成二十四年四月一日、『即位の日』の夜。

警備が手薄、刺客がイ・サンを狙った。一對一だ。丁度その時、なんと地震速報が入った。「十一時六分ごろ岩手県沖で震度4の地震が発生しました。これによる津波の心配はありません。場所は」。アナウンサーが出て地震情報が繰り返し読まれた。

そして二十分後、放送が再開された。なんとイ・サンは生きていた。刺客は、どうなったのだろう。大勢の悪者が拷問にかけられた。王様の娘は「清」に逃亡しようと計画した。王妃は自殺をはかった。

「遅くまで起きていたかいがなかったわ。何がなんだかわからないままだわ」「そりゃあ、おかしいねえ。地震速報は、ドラマを中断しないで、枠の所に出すようにすればよかったですね」「今日の分は、来週放送すると書いてあったから、来週は、何を置いても観るようだよ」。

童謡の会で話すと、『イ・サン』を観ている人も、そうでない人まで話に乗って来た。八十歳を過ぎた山形の義父も『イ・サン』の熱心なファンだと話すと、ますます盛り上がった。「今放送している所は序の口よ」と言っていた童謡の会員が、「それって、まだ中盤よ。先生、DVDを貸しましょうか」と、また言って来た。

「とどめ」の全話

『イ・サン』平成二十四年四月八日、『即位の日』の夜の放送が再度あった。四月一日と同じ番組だ。こんな事は珍しい。視聴率が高い事がわかります。

刺客がイ・サンを襲った。一対一の戦いになった。……「誰に頼まれた?」「死んでいくものに教える必要はない!」。イ・サンが腕を切られ床に剣が転がり倒れた。イ・サンしつかり!「ひと太刀で楽にしてさしあげます」刺客が、とどめを刺しに来た。最後の瞬間、イ・サンは倒れたまま髪飾りを手裏剣しゅりけんのように投げた。髪飾りは刺客の胸に命中した。刺客はバツタリ倒れて死んだ。その他の二十人の刺客も軍に制圧された。「やった!」。

その後は、先週観たが、また観た。拷問の場面を二回も観ることになってしまった。痛そうだ。拷問のシーンが夢に出た。私は「痛い、痛い」と、うなされた。刺客を送った主犯は、毒を飲まされ処刑された。「無念であろう」と悪役のハンサムな役者さんに同情した。処刑のシーンはすさまじかったので、その後、思い出すたびに吐きそうになった。物語と現実を混同して観てしまうのは、老人にありがちな事です。

平成二十四年四月二十二日より第二部がスタートした。王となったイ・サンの活躍に期待したい。「本当の事を、ドラマ化したのだそうですね」と、童謡の会員が言ってきた。彼女もイ・サンのファン、毎週観ている一人です。韓国ドラマ『イ・サン』は、朝鮮王朝二十二代王の生涯を描いた歴史ロマンです。

後日、童謡の会で『荒城の月』を歌った。第二章の歌詞「♪秋陣営の霜の色 鳴きゆく雁の数

見せて 植うる剣に照りそひし 昔の光いまいづこ」の説明の時、『イ・サン』を思い出したので、ひと節「イ・サンと刺客」の話をした。いい気分で作ってしまった。『イ・サン』を観ていた人も、そうでなかった人も、あされたが、誰も注意する人はいなかった。みなさん理解ある会員です。感謝しています。

京都一人旅

二泊三日の予定で京都に行った。夫が所属する日本蜘蛛学会の大会が京都であったからです。新幹線で京都駅に到着。駅前の「京都新阪急ホテル」を確かめてから「京都タワー」（京都市下京区烏丸通七条下ル）に上った。高さ百三十一メートル。円形の展望室からは、三百六十度の景色を見る事ができた。これから観光する場所をチェックした。係りの人に勧められて「たわわちゃん」と展望記念を撮りました。写真担当の男性が「良く写っています。いかがですか」と言い、夫が「記念になります」と料金を支払った。

蜘蛛学会の大会がある「京都女子大学」に向かった。駅前から大学行きのバスに乗車。バス路線は、「プリンセスライン」といい、終点が大学だった。昼は学食を食べた。夏休みなので学生が少なかった。おっとりとした雰囲気の大学だった。

ここから一人旅になった。バスで引き返して「東本願寺」（京都市下京区烏丸通七条上ル）に行った。あいにくクレインが入り、大がかりに改築中だった。庭から「京都タワー」を見ることがで

きた。門前の「烏丸通」にある「大噴水」は、水が出ていかなかった。「烏丸通」をズンズン歩いた。「西本願寺」に行くつもりが、全然違う方向に歩いていった。足が痛くなり駅に引き返した。サンダルを脱ぐと足の裏が水膨れになっていた。

まだ、陽が高いので、「近鉄」に乗って「東寺」(京都市南区九条町一)に行った。「近鉄」に乗るのが目的だった。たった一駅だった。電車に揺られ、ウキウキした気分になった。「近鉄」の写真を何枚も撮った。「東寺」は、「東寺駅」から五分の所にあつた。途中、「どら焼き(笹屋伊織)」を売っている女の子がいたが、「江戸時代末に東寺のお坊さんから副食の考案を頼まれて焼いたのが始まり」とは、知らなかった。さらに、「竹皮の香りがほんのり移っている。毎月二十から二十二日の三日間のみ発売」とは、知らなかった。今日は八月二十一日。知っていたら買ったが、後の祭りだ。旅行は勉強をして行くものです。

境内や参道には「元祖フリーマーケット」の「東寺弘法市」が開かれていた。毎月二十一日、骨董品や古着、名産品の露店。もう四時過ぎだったので品物を片付けている所が多かった。小田原城でも四月初めに骨董市がある。どこから持って来たのだらうと思うような品物も並んでいる。世界遺産「東寺」の五重塔は有名。料金五百円。外国人の二人ずれの男性が、入るのをためらって帰って行った。池の石に亀がのんびり寝ていた。

翌日、京都駅からバスで「京都水族館」(京都市下京区観喜寺町35-1)に行った。「イルカショー」が始まる所だった。ストロー笛が全員に配られ、「ピッピッピッ」と鳴らすと、イルカたちが

「キューキューキュー」と鳴いた。イルカたちの鳴き方は二種類あった。イルカが空を舞った。「オオオーツ！」。

「梅小路公園」では、炎天下、派手な衣装の若者の集団三十人ほどが「ヨサコイソーラン」の踊りの稽古をしていた。打ち込めることがある事は、好い事です。

バス停にいと、「西本願寺」（京都市下京区堀川通花屋町下）行きの、土曜日だけ運行のバスが来た「ラッキー」。世界遺産「西本願寺」は、「お西さん」の名で親しまれている。浄土真宗本願寺派の本山。浄土真宗は、親鸞聖人によつて開かれた。

立派な「唐門」から「阿弥陀堂」に入った。本堂では祈祷（祈りの儀式）をしてもらう一家がいた。準備が整うと、紫の衣の僧侶が中央の一段高い場所に座った。四人の僧侶は、下の場所に楽器を持つて座った。紫の衣の僧侶に続いて四人の僧侶の雅楽演奏と唱和が始まった。八百人以上が一度に参拝する事ができるという本堂に、雅楽の音と僧侶の声が厳かに響いた。

終わつてから若いお坊さんに質問をした。「楽器の名前を教えてください」「笙（しょう）、ひちりき、太鼓、竜笛（りゆうてき）です」「太鼓は太鼓なんですか？」「そうです」「ありがとうございます」。（太鼓は、「太鼓」または「楽太鼓（がくだいこ）」という）。

もう一人の若いお坊さんにも質問した。「歌い出しの音は決まっていますのですか？」「はい、「ド」とか「ミ」とか「ソ」とか、高さは決まっています。だいたい最初は低くて、次第に高くして、最後はまた低くして終わります」「そうですよね。最初に歌い出した紫の衣の人が、ピヤーツと高い音で歌い出したら、後の四人の人が歌えなくなつてしまいますよね。転調して高くなつたら、

ますますついていけないですな」「そうです。今は、女性の僧侶も大勢いますから、高い声の場合もあります。大体は、みんなが歌いやすい音程から歌い出します」「よくわかりました。ありがとうございます」。

山形の義母は謡の師匠をしていた。弟子の前ですぐに歌い出すのが不思議だった。どの音から歌い出すのが不思議だった。前奏を聞いてから歌い出す童謡や唱歌ではありえないことです。

今回は、一曲の中に三つの区分を有する中曲だった。長い曲ではなかったのに、アメリカ人の夫婦が我慢しきれなくて席を立った。

中央の部分は半終始（属音で止める）をもって第三部につながり、最後は完全終止で謡いおさめる。日本人は、この幽玄な「さび」と「わび」が交差する音楽が大好き。お寺で聴くと、さらにありがたさが倍增する。

雅楽は、五世紀ごろ唐（から）から伝わって来た物で、これに我が国古来の音楽が結びついて日本化され宮中や寺院の楽人によって今日まで伝えられた。律音階による雅な旋律には、いろいろな歌詞がつけられている。音楽大学では、西洋音楽だけでなく日本音楽史も学ぶ。

三日目、京都駅前バス停から「京都国立博物館」（京都市東山区茶屋町527）に行った。中には国宝の大きな「金の大仏」があり、その前で動けなくなつた。「ほしいなあ、一緒に暮らしたいなあ。毎日を吹きかけて磨くよ」と感動した。中国人が「巻物」の文に感動していた。漢字ばかりの古文書だ。

目の前に国宝「三十三間堂」(京都市東山区三十三間堂廻り町657)があった。「三十三間堂」という寺名は、本堂内陣の柱間が三十三ある事に由来する。以前、家族で来たことがあったが、また入ってみる事にした。整然と並ぶ「千手観音」は懐かしく、庭を歩くと武蔵と小次郎の映画のワンシーンが思われた。「待っていたぞ、武蔵、遅れて来るとは卑怯千万」「諸事情あつての事。つべこべ言うな、いざ勝負」。

「養源院」は休みだったので、近くの「智積院」(京都市東山区東大路通七条下ル東瓦町964)に行った。読経が流れ、大勢の僧侶たちのお勤めが始まっていた。「戦没者慰霊塔」があった。フィリピン、マニラ、ビルマ、タイ、ミンダナオなどの文字が刻まれている。私は黙って頭を下げた。今年、戦後七十年。菊の花が活けて有り、清掃がいきとどいていた。くしくも階段を上がって来るアメリカ人の老夫婦に出会った。奥さんが「ハロー」と言ったので、私も「ハロー」と言った。旦那さんは階段をやっと上って来た。私の方から「こんにちは」と声をかけると、嬉しそうに「こんにちは」と言った。私は、英語が話せないことを残念に思った。バスで京都駅に向かった。

今度は「平安神宮」(京都市左京区岡崎西天王町)に行ってみる事にした。バスを降りると「京都立図書館」(京都市左京区岡崎成勝赤町9)があった。ハイカラな建物の図書館。入口には「宮尊徳先生像(読書像)」があったので驚いた。

「平安神宮」は、広大な敷地にあつた。朱色の「大鳥居」や「応天門」の柱が目をはく。テレビニュースの「時代祭」で見たことがあつた白砂の広場は美しい。だれもいない有料の庭「神苑」を楽しんだ。しだれ桜の時期に、また行こう。

近くに「京都市動物園」があった。ライオン、トラ、ヤギ、みんな暑くて寝ている。「起きろー!」子どもが騒いでも寝ている。カバはプールに沈んだまま。ペンギンは外に立っている。「置物かと思つた」と、孫と一緒に来ていたおばあさんが言つた。この猛暑、ペンギンは外でいいの? フラミンゴ、オオム、フクロウ、キリンは、ジツとしている。炎天下、見て回るのは、これ以上は無理なので外に出た。動物園の出口の自動販売機で水を買つて飲んだ。暑くてたまらない。

反対側の「京都市美術館」(京都市左京区岡崎円勝寺町124)に入る事にした。「マグリット展」をやつていた。『ピレネーの城』や『空の鳥』を見ることができた。自分と同世代の女性が娘と来ていて、「ああ、気味が悪い。もう二度と、この美術館には来ないわ」と言うのが聞こえた。私は、前から見たかつた本物を見ることができたので「よかつた」と喜んでいたので、残念だと思つた。この美術館には十月から「フェルメールとレンブラント展」が来る。フェルメールは『水差しを持つ女』、レンブラントは『ベローナ』の展示が予告されていた。

今回は、金閣寺、銀閣寺、京都大学、嵐山、嵯峨野、清水寺、映画村など、子どもや夫と前に行った所は省いた。ホテルの土産物売り場で、「そんなに買ったの」と夫が驚くほど漬物を沢山買った。西陣織のお財布、お坊さんと打出の小槌のキーホルダーも記念に買った。大満足の一人旅でした。

あとがき

私が感動した事を童謡の会で話しています。感動が伝わっているでしょうか。

『朧月夜』

日本の美しい国土を子どもたちに伝えるために作られ、歌詞は文語体で格調高く美しい。現在も小学校六年生の音楽教科書に掲載され、ずっと歌われ続けています。歌詞のリズム（音数律）は四・四・六調で整っています。三拍目から歌い出す弱起を学習するための教材。歌い出しの「菜の」は三拍目から始まります。

一番は、春風が小さい花びらを揺らす一面の菜の花畑。その向うに太陽が沈み、春霞がかかった西の空には「夕月（三日月）」があり、黄色の菜の花畑は、ほんのりと明るい。「菜の花」は春の季語。「にほひ」は古典では視覚に関する語、目に立つ色合い。「山の端（は）」は、山の端（はし）、即ち山の麓（く）の裾（すそ）のこと。「山の端霞深し」は山の麓あたりは霞（かすみ）が濃くたなびいているということなのです。

二番は、さらに時が進み、「里わの火影も」、「森の色も」、「田中の小路を たどる人も」、「のうに見えるものだけでなく、「蛙のなくねも」、「かねの音も」、「など耳でとらえたもの、そして五回出てくる」……も、「で列挙れいぎょされる全ての物が霞かすんでいる、のどかな春の宵よいの情景です。初出の『尋常小学唱歌』には読点がある。「さながら霞める 朧おぼろ月夜。」に係るので句読点は重要です。「朧おぼろも春の季語。「灯籠ひのぼろ」「草朧くさおぼろ」「鐘朧かねおぼろ」などがある。一番から二番にかけて夕刻「霞かすみ」から宵よい「朧おぼろ」へ時間が流れる。「里わ」は、里の廓くわく（くるわ）、村里のことです。

『鎌倉』

NHKテレビの人気番組『ブラタモリ 鎌倉』を観ていると、長谷寺に勤務している人が、葛飾北斎が描いた富士山の入った江の島詣みやぎでの浮世絵を見せて「江の島詣みやぎでをした人々が帰りに鎌倉に立ち寄った」と説明した。私は「そうだったのか」と感動した。文部省唱歌『鎌倉』の一番は「七里ヶ浜の」と始まって、つづいて鎌倉の中心部に入って行きます。さらに北鎌倉へ抜ける道順に歴史と名所旧跡が歌い込んである。歌えば歴史の勉強になり、土地のガイドもしてくれます。

『夏は来ぬ』

「夏は来きぬ」は、「夏が来きた」という意味です。この場合の「ぬ」は完了の助動詞で、「夏は来きぬ」という打ち消しの助動詞ではありません。「夏は来きぬ」と読めば「夏が来きぬ」という意味になります。

「垣根に明るく照り映えている目にも鮮やかな白い卵の花が咲いたよ、ホトトギスが早くもやって来て声をひそめて鳴く初音をこっそり聞かせてくれる。その夏が来た」という意味です。ホトトギスが垣根に飛んで来て鳴いているわけではありません。

『かたつむり』

「カタツムリは、雌雄しゅうどうたい同体です」「知らなかった」と童謡の会場から感動の声がありました。続いて「私は、でんでん虫になりたいと思っています。希望を持って努力すれば、いつか夢は叶うでしょうか」と言うと言とうと爆笑になりました。

『証城寺の狸囃子』

「狸囃子」ですが、詩の中に「狸」という字が一字ありません。野口雨情の大傑作です。

『かあさんの歌』

歌詞の一番は「かあさん(は)」、二番は「かあさん(は)」、三番は「かあさん(の)」が正しく、(は)(は)(の)と覚えて歌います。

「かあさん」に対して「おとう」という言い方が使われています。メロディーにピッタリ合っています。普通「かあさん」の対語は「とうさん」で、「おとう」の対語は「おかあ」です。そう考えると、この「かあさん」に対して「おとう」という表現は、作者の窪田聡くぼたさとしが一番苦労した

部分だったのではないでしょうか。「かあさんは 夜なべをして」「おとうは 土間で」と歌い上げた時、この歌はヒットする運命が決まったのかもしれない。

『ふなっこ』

昭和十一年四月二十八日から五月七日の十日間、東京の玉川学園（創立者・小原國芳）の学生・生徒・引率の先生ら三十四名は、玉川学園の教育を地方で実際に見てもらうために秋田、山形、新潟方面へ公演旅行に出かけました。東北各地の小中女学校を巡回公演し、教育啓蒙が目的。

メンバー三十四名は、（男子）専門部十名、中学部三名、（女子）女学部十名、高等部四名。（引率の先生）小原國芳先生、斎藤由理男先生、岡本敏明先生、森稔先生、矢部薫先生、小原先生のおばさま、白石嵯峨おばさまの七名。小原哲郎君（大正十年生まれ）も参加していた。哲郎君は、小原國芳先生の息子で、後の玉川学園園長（現・小原芳明園長の父親）。

五月一日、合唱とデンマーク体操のプログラムを持った公演旅行団の一行は、秋田の金足西尋常高等小学校（現・秋田市立金足西小学校）を訪れました。金足西小に寄ったのは、学園出身者の縁故があったからです。演奏会は、初めて聴く混声合唱の響きに驚き、拍手喝采。楽しい時間を過ごし盛況の内に終わりました。

当日の夜の歓迎会で同校の中道松之助先生が、余興として「どじょっこ ふなっこ」の元唄を詩吟調で愉快に歌いました。その場に居合わせた合唱指導者・岡本敏明先生（玉川学園の音楽教師、当時二十九歳）は、大変興味を示し、詩をメモして即興で混声合唱に作曲。宴会が終わる頃

までには曲ができあがり、混声三部合唱を披露して拍手をあびました。

翌日、移動の車中（奥羽本線追分駅発、羽越本線羽後本荘駅着）で練習し、次の訪問校の秋田県立本荘高等女学校（現・秋田県立由利高等学校）で午前十時より混声四部合唱を発表（初演）した。以来、全国で愛唱されています。

インターネット検索『池田小百合なつとく童謡・唱歌』（事典）、エッセイ『満点ママ』と『歌って暮らせば』は、インターネットや、タブレット端末、スマホでも読むことができます。便利な時代になりました。ゆっくり読んでください。

童謡や唱歌は心を楽しんでくれます。美しくしてくれます。慰めてくれます。みんなで歌を歌って元気に生きて行きましょう。

平成二十七年十一月三日

池田 小百合

著者紹介

池田 小百合（いけだ さゆり）

神奈川県生まれ。国立音楽大学卒業。

童謡の会を主宰「あしがら童謡の会はとほっぱ」「童謡を歌う会赤い鳥」

「童謡を歌う会青い鳥」「童謡を歌う会玉手箱」「童謡を歌う会真鶴」。

著書『童謡を歌おう』（センチユリー）。『童謡・唱歌 風だより』（春陽堂）。

『満点ママ』『歌って暮らせば』『童謡で遊ぼう』『読む、歌う 童謡・唱歌

の歌詞』『童謡と唱歌 歌唱の歴史 I（春夏のうた）・II（秋冬のうた）』

（以上、夢工房）。

『子どもたちに伝えたい日本の童謡 神奈川・東京』『もっと好きになる日

本の童謡』（以上、実業之日本社）。

CD解説 坂本龍一監修『にほんのうた』第二集、第三集、第四集（A V E X）。

Janan「あの歌この歌」銀行フリーPR誌（きんざい編集部）。

マイウェイ「かながわ童謡・唱歌物語」No.79（はまぎん産業文化振興財団）。

インターネット『池田小百合なっとく童謡・唱歌』（事典）などがある。

歌が好き

二〇一六年二月十日 初版発行

定価 本体価格一七〇〇円＋税

著者 池田 小百合 ©

制作・発行 夢工房

〒257-0028 神奈川県秦野市東田原1-0-1四九

TEL(0463)82-7652 FAX(0463)83-7355

<http://www.yumekoubou-t.com>

ISBN978-4-96158-071-0 C0095 ¥1700E

2016 Printed in Japan

日本音楽著作権協会（出）許諾第 1513483-501